

第17図 レーダー写真(福岡管区撮影)昭和32年7月25日21時25分、高度角0.8°、距離200km.

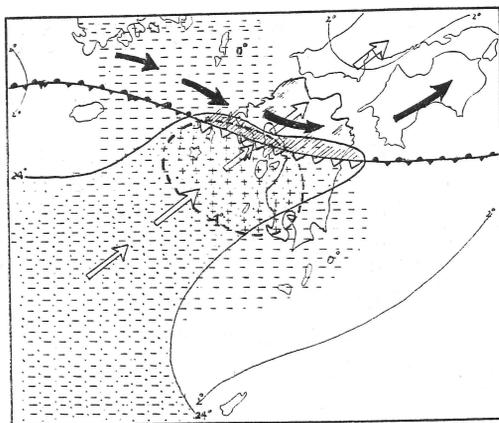
前線に平行しており、生じた雷雲はこの上空の西北西の風に流されて移動したと思われる。従って降雨の区域は停滞前線にはほぼ平行した巾の狭いものとなっているのは興味深い。また停滞前線より北方の寒冷乾燥空気の側にあまり広い範囲の強雨域が見られないのは、これらの雷雲は不連続面滑走によって生じたものでなく主として対流現象によって生じたものであることを示すものと言えるであろう。

最後に、以上に述べた、500ミリバル面の最強風線、850ミリバル面の最強風線、湿舌と停滞前線、不安定線の位置、不安定指数マイナス1度の線、レーダーの強雨域を一つの図上に示し雷雨の生じた状況を示す。

(第18図参照)

5. むすび

今回の大災害の直接の原因は、降雨量そのものが意外に大きく、かつ災害当時降雨強度がものすごく大きかったことであるのは何人も異存のない所である。本明川のあまりにも急激な出水やまことに意外な山津波が至る処に頻発し死者千名を越えるという惨事を出したのである。このような空前の大惨事の以前に長崎海洋気象台*



第18図 不安定域の状況 (昭和32年7月25日21時)

----- の部分は露点温度20°以上の部分で湿舌を示し
 は安定指数 -1°C の ----- は 0°C の不安
 + + + + 定なる部分を示す。=> は 850mb の高度における風速
 + + + + 極大値線の走向を、=> は 500mb のものを示し、その
 交点の南側の停滞前線上の湿舌の入り込む部分はレー
 ダーエコーより強い雨(斜線の部分)が観測される。

* では当日午後2時、8時30分、11時10分と3回の、いずれもきわめてタイムリーな大雨警報を発令して一般に伝達したが、今回のような天災的要素の多分に多い気象情勢下では死人の山を築くのはいくぶんでも軽小にするという役目しか果たえなかった。しかし今回えられた貴重な教訓は必ずや将来に生かされ、これ以上の天災がきても今回よりもより軽小な災害ですまされる日の到来することをかたく信じたい。

本稿を草するにあたり、つねに心からなる援助と協力を惜しまれなかった長崎海洋気象台藤井台長および予報課職員各位に衷心からお礼を申し上げます。

(書評)

雲・雪・塵

伊東聖自著 法政大学出版局 1957年5月15日刊
 B 6版, 235頁, 280円。

雲・雪・塵、これは著者が多年手がけてきた研究テーマである。この本は、ある時は啓蒙のために、ある時は自分のために、おりにふれて書き綴った短文をまとめたという形になっており、随筆集である。

文章のすみずみまで著者の心のかよった本である。読者に著者を感じさせるような著書は少ないが、この本はその少ない本の一つである。淡々と事実を述べてゆくなかに、著者の心を感じさせる。そのような本である。この本のすでに大新聞等にとりあげられ、好評をばくして

いるのも当然至極である。

内容は題名の3編のほか、第4編として、題名に入らないような内容のもの、寺田寅彦先生断片語録がまとめている。随筆集ではあるが、普通の教科書には載っていないようなことがらも含まれており、気象を専攻するわれわれにとっても参考になることが多い。

ただ一つ、このついでに注文を申しあげる。日本の大都市で現在問題になっている大気汚染についてであるが、この本ではその例の多くを外国の資料に依存して書かれている。日本におけるこの問題の現状を、日本の資料によって、その害と対策を説いて欲しかった。死の灰のおそろしさを身近に感じさせるのは、われわれの身近の生々しい資料によって説かれるからでもある。

(奥田 穰)